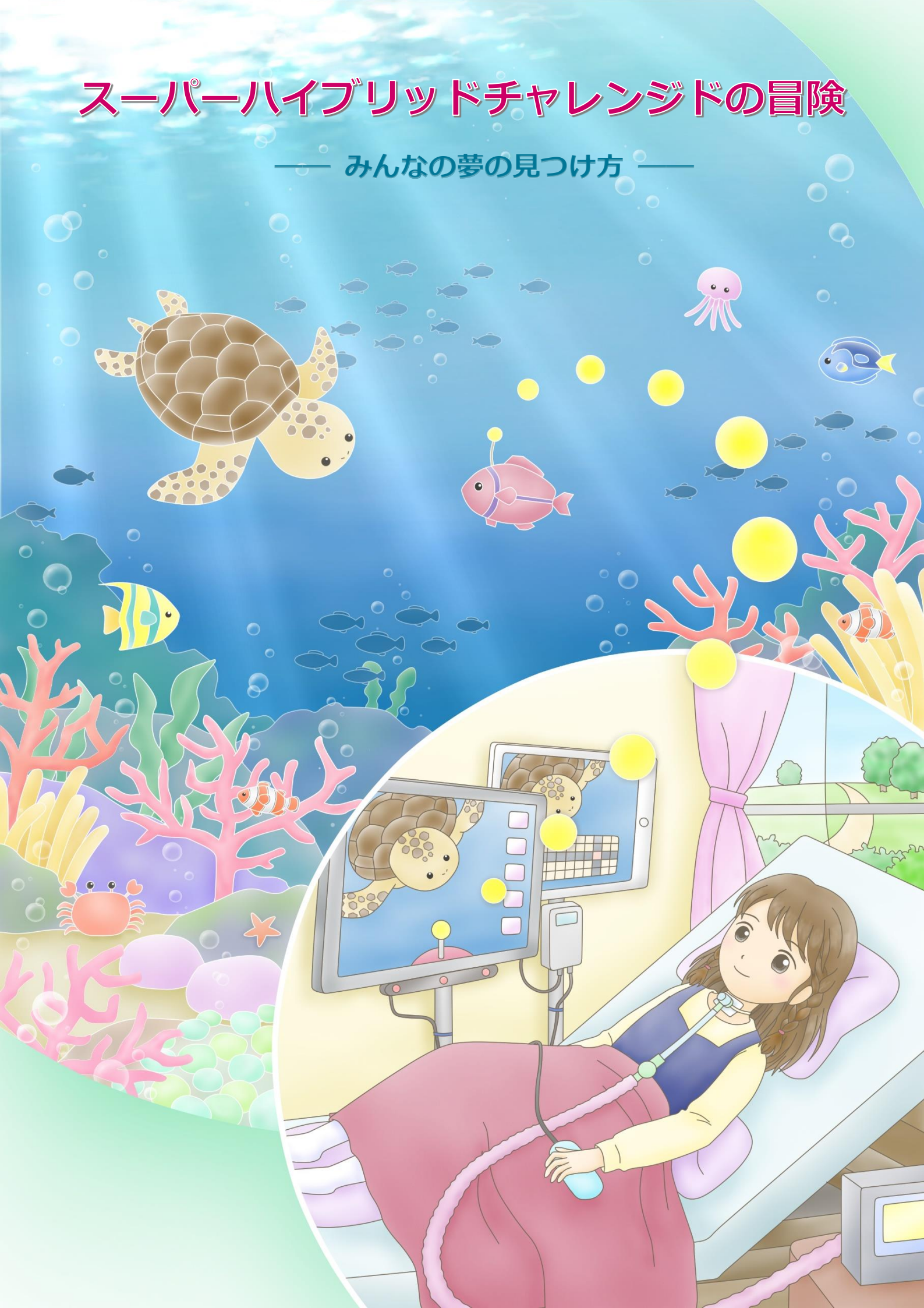


スーパーハイブリッドチャレンジの冒険

—— みんなの夢の見つけ方 ——



目次

はじめに	1
移動遊具を使ったチャレンジ ―BigSmileLoco 編―	4
リモートツアー 奄美大島編	6
スーパーハイテク&ハイブリッドチャレンジド編	14
コミュニケーション編	16
お絵描き & UMU プロジェクト	20
おもちゃ遊び編	24
熊本編	26
未来に羽ばたくドローンプロジェクト	30
ComLabJapan チャレンジド：先輩からのエール	35
おわりに	37



はじめに

この冊子に登場するお子さん達は、病気などで体を自由に動かすことが難しかったり、色々な体験がしづらかったりという「ハンディ」をもっています。でも、最近は色々なハイテク技術を使うことで、今まではできなかったことにチャレンジすることができるようになってきました。海外では障害のある人のことを、「チャレンジド＝挑戦する人」と呼ぶそうです。とても良い表現だなと思います。そしてハイテク機器などを使ったチャレンジドのことを「Superhybridchallenged（スーパーハイブリッドチャレンジド）」と呼ぶ事にしました。

例えば、お家の中で好きなおもちゃをとりにいきたいと思っても、自分で体を動かすことができないと、そこまで行くことができません。もっといえば、お家の中がどんな風になっているかも自分で見に行くことができません。そんな時、簡単に動かせる移動遊具を使ったり、ドローンのカメラでお家の中を探検したりするとよいかもしれません。お家の中でペットがどんなところにいるか、姿勢を変えたり歩いたりできなくても、自分で見ることはできます。ちょっとした工夫があれば、お家の中だけでなく、旅行に行ったり、買い物をしたり、学校の先生の体験をしてみたり、色々なことができる時代になってきました。

これから先はもっともっと色々なことができる時代が来るでしょう。この冊子で紹介されたことは、あっという間に「当たり前」になるかもしれません。そうしてくれると良いな、という気持ちを込めて、このプロジェクトに関わったメンバーで作成しました。そしてこの冊子に登場した方だけでなく、この冊子を読んでもくださった方にも新しい「夢」が見つかることも願って副題をつけました。

チャレンジドの挑戦はまだまだ続いていますが、この冊子に出てくる「お友達」のことを応援する気持ちで読んでみてくださいね。今回の取り組みをたくさんの方に知って欲しいと思い、この冊子に出てくるチャレンジド達と同世代の方にも読んでいただきたいという気持ちもあり、なるべく簡単な日本語で書いてみることにしました。

この絵は、以前『合意形成のショコラティエ』という冊子でご紹介したチャレンジド達の「夢」を紹介したものです。もちろん「夢」はいくつあってもいいですし、変わっていてもいいですよ。この時に教えてくれた「夢」がどんな風に育っていったのか、チャレンジド達のまわりにいる私達をどこに運んでいってくれたのか、タイトルにもある「冒険」をぜひ一緒に応援する気持ちでお読みいただけると嬉しく思います。



この冊子でご紹介しているのは、今回の取り組みの一部になります。SNS 等でも別途発信をしていますので是非フォローよろしくお願いします。そして紹介している画像の一部は、チャレンジ達自身が撮影したものも含まれます。

私たちの夢～



そうちゃん 5歳 鹿児島県 脊髄性筋萎縮症1型
所属:地元幼稚園の年中さん 将来の夢:お医者さん
来年は1年生になります！
幼稚園のお友だちと同じ小学校でたくさん遊んだり、
お勉強したり、色々なことにチャレンジしてみたいです！
初めからやらないのは大嫌いで悲しくて泣いちゃう僕なので、
ほくまりのやり方で何でもチャレンジしたいです！
お友だちと色々なことが出来たり、
先生達に驚かせてもらえたりするととても嬉しいです。
練習だって頑張るのが楽しいです！
家族と旅行にも行きたいです。ディズニーランドに
行きたいです。新幹線や飛行機にも乗ってみたいです。
やりたいことはたくさんです！

ゆうさん
特別支援学校1年生
鹿児島県
脊髄性筋萎縮症Ⅰ型

大きくなったら…
パティシエになりたい。
飛行機に乗って
ディズニーランドに行きたい。
母の思い…
本人が望むことは、
どんなことでも挑戦させてあげたい！



石丸 結さん 中学1年生 福岡県 ミオパチー
まずはやってみたい事としての「夢」は「本物の虹を見てみたい！」です。
晴れた日には窓から虹が見えるか聞いてくる事があります。
余程虹が気になっているようです。
そしてなりたい職業としての「夢」はまだハッキリとは言えませんが、
音楽や映像に関係する事が好きかなようです。
一緒に歌おう！」と誘ってみたりリズムに乗って瞬きをしてみたり…
そんな感じなので指揮者など向いているのでは？と思っています。



陽菜さん 高校1年生 鹿児島県
SMA1型
今年、中学を卒業、高等部に進学するのですが、
「高校生になる！」
「修学旅行(ディズニーランド)に行きたい」
と言っています。

※文は前年度に書いていただいたものです

移動遊具を使ったチャレンジ —BigSmileLoco 編—

自分の体を自分で動かす。言葉で書くと簡単だけれど、それが難しいお子さんもいます。動きたい理由には色々あります。遊びたいおもちゃを自分でとりたい、体をぶつけて遊んでみたい。そんな希望を叶えることが、今回できました。

BigSmileLoco(ビッグスマイルロコ)を貸出し、「自分の体を自分で動かす」というチャレンジをしました。生まれた頃から体を動かすことができないと、移動できないから困るということのほかに、遠い・近いなど距離や重さなどの体に関係した感覚がわかりにくくなるようなことがあるようです。遠い、といってもどのくらい遠いのか。自分の中に比較する物差しがないことも関係していると思います。また自分の行きたいところに行くことで、好みを表したり希望を伝えたりすることもできます。色々難しいことを書かなくても、移動遊具を操作しているときにチャレンジドたちの表情が、何よりもその素晴らしさを語ってくれています。

さて、チャレンジドたちの中には、移動遊具を卒業したあと、本格的な電動車椅子の操作へ次のチャレンジを進めている子もいます。日本では障害が重たいお子さんの電動車椅子を福祉の制度で手に入れることがなかなか難しい状況にあります。そもそも上手に操作できないと、許可が降りないのですが、練習用のものも入手しづらく、上手になって申請したくても、そういう手段が身近にない状況です。今回のチャレンジには、移動遊具が上手に操作できるようになった後に、自分の電動車椅子を手に入れたいという希望をもっているお子さんもいます。移動遊具を堂々と、生き生きと、そして上手に操作している様子をたくさんの人に見ていただき、本物の電動車椅子を手に入れられるように応援していただきたいと思っています。





- 株式会社るーとさんの HP はこちら。
<https://root-ca.jp/index.html>



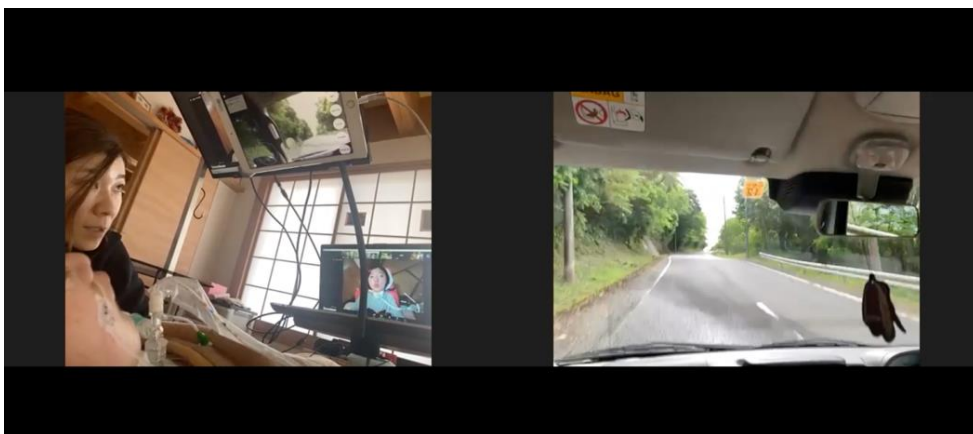
リモートツアー 奄美大島編

世界遺産になった鹿児島県の奄美大島。雄大な自然に魅了され、多くの観光客が訪れます。海も山も素晴らしく、アマミノクロウサギなどの野生動物も有名です。冬には船に乗って鯨を見に行くツアーも人気です。

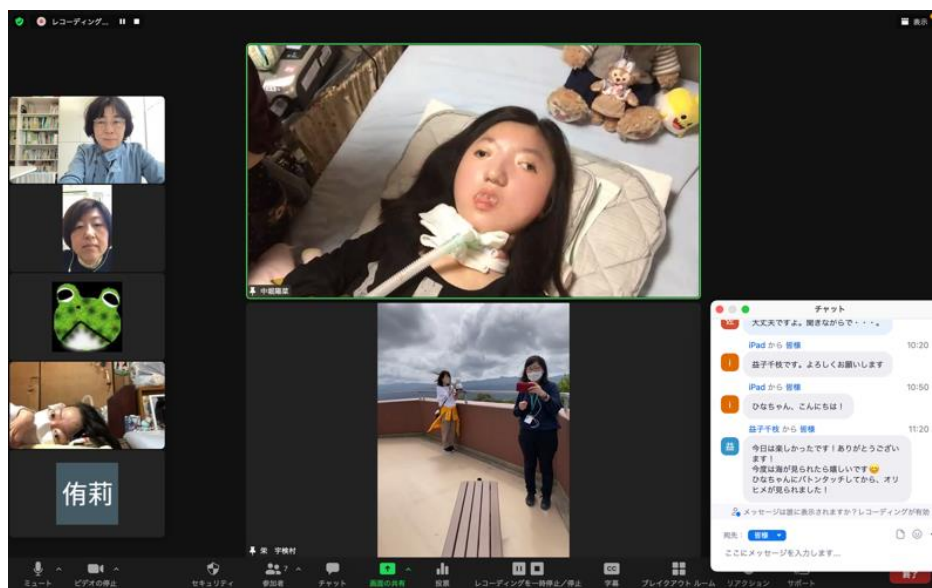
でも体が不自由だと、色々なアクティビティに参加しづらかったり、行ける場所にも制限が大きかったりします。バリアフリーの施設も増えているとはいえ、自然がたくさんある地域に足を運ぶことが難しい方が多いことも事実です。

今回は、奄美大島の宇検村の「地域おこし協力隊」の皆さんの協力を得て、リモートツアーを何度か企画しました。リモートツアーはオンラインを使用し、時には遠隔で動くOriHime分身ロボットを使ったりして楽しむ旅行のことです。宇検村は奄美空港から2時間ほどの自然豊かな地域で、湾状の海には真珠等の養殖も盛んです。日本の中で美しいビーチとして有名なタエン浜やアランガチの滝など、素晴らしい場所があります。

リモートツアーは、集団で行くツアーに加え、それぞれチャレンジのリクエストを聞いて作るオーダーメイドのツアーも経験していただきました。中には自分自身でweb検索して観光地を調べ、体験してみたいアクティビティをリクエストしたお子さんもいました。具体的に思い浮かばないお子さんには、好きなこと、興味があることを教えてもらってお母さまたちと一緒に行き先を考えたり、日常の興味からご本人が希望しそうな場を設けたりしました。たとえば、動物が好きなお子さんは、奄美の水族館で亀の餌やりチャレンジしたり、人の中にいることが好きなお子さんは、地元ラジオ局での番組出演を果たしたりしました。



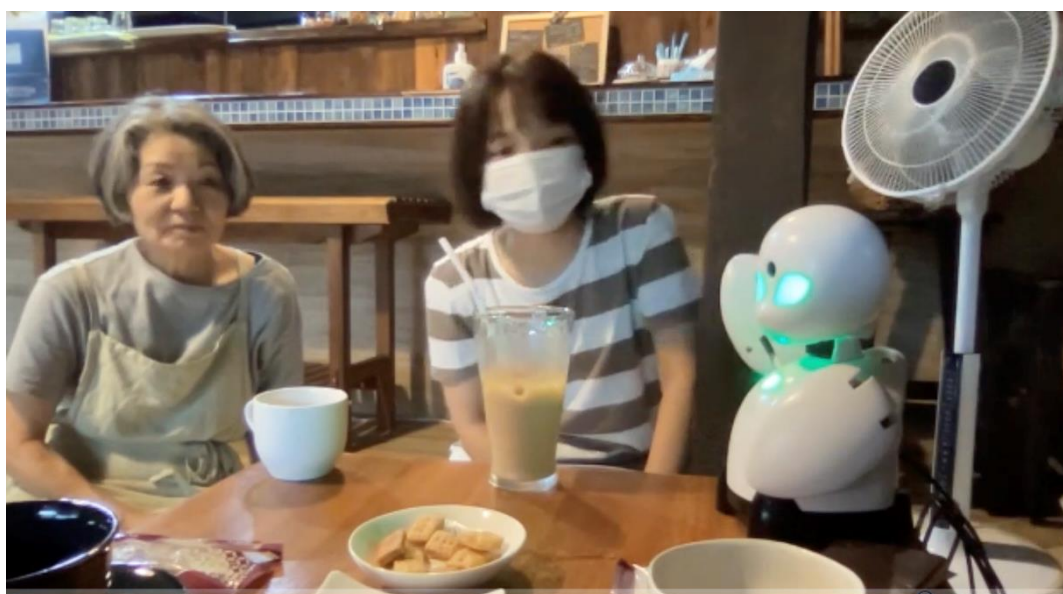
オンラインで繋がったお友達と一緒に、車窓から楽しめます。左はYくんとお母さま



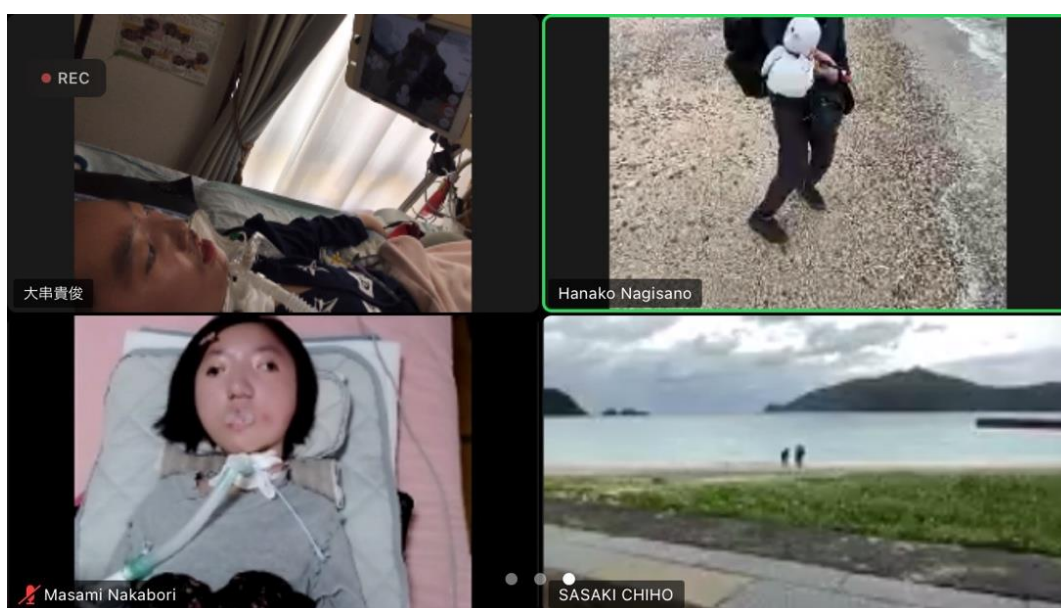
宇検村の観光課の方の協力も得て、宇検村の見どころをオンラインで旅します。Wi-Fi環境など、リモートツアーを進めていくヒントを手にいれることもできたようです。



OriHime 分身ロボットの操作をしている画面から見える景色です。宇検村の方が、OriHime 分身ロボットを撮影している様子が写っています。



南国らしい大雨が降ったので、素敵な古民家カフェで雨宿りしながらほっこりティータイム。古民家カフェなど和風のお店にはなかなか入ることが難しいのですが、分身ロボットで楽しむことができました。



雨も止んだので、宇検村が誇る美しいビーチ「タエン浜」へ。リモートツアーにも慣れてきたチャレンジド達は、OriHime 分身ロボットを交代で操作したり、地元のお子さんに話かけたりしました。

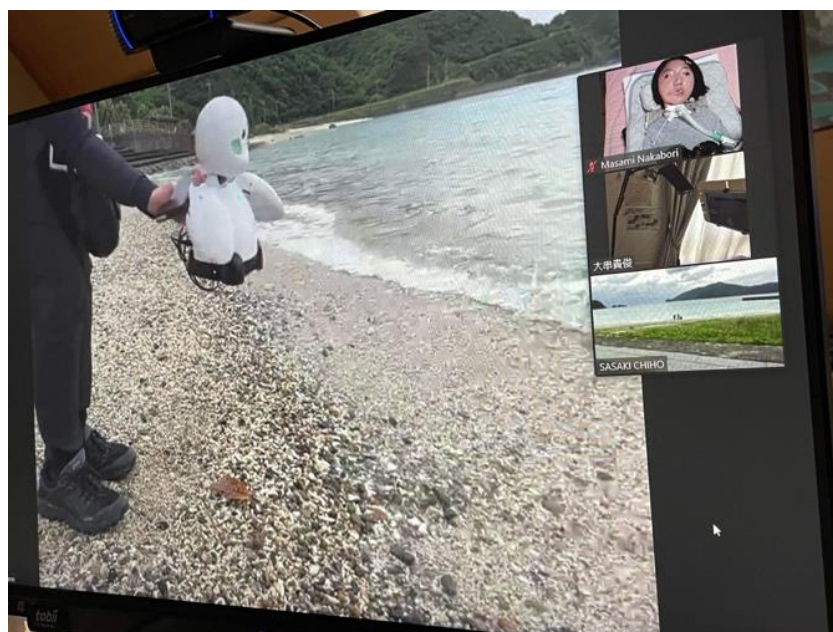


Hina さんが自宅で機器を使いこなしてツアーに参加している様子です。コミュニケーションのための機械や、OriHime 分身ロボットを操作するためのタブレット、Zoom で他の参加者と交流するためのパソコンなど、たくさんの機器を操作しています。気に入った画面は、自分で撮影して手元に残しておきます。

こちらは COTO さんがリモートツアーに参加した時の自宅での様子です。たくさんの機器を使いこなして、地元の方との交流もスムーズに楽しむことができました。自分で行きたい場所を調べ、リクエストし、想定される会話を事前に登録しておいて、ツアーの中でスピーディに会話を楽しむことができるように、たくさんの工夫と準備をしていました。もちろん初めて会う人のための「自己紹介」も準備していましたよ。「へえー、そうなんだ」など、会話の相手が話をどんどんしたくなるような「あいづち」もとても上手でした！



大きな車椅子に乗って寝た状態で移動すると、足元を見ることが難しくなります。今回は OriHime 分身ロボットを使うことで、渚を楽しむことができました。「波打ち際（なみうちぎわ）」という言葉の意味を初めて知ったチャレンジもありました。また翌日のイベントで使う「シーグラス」が、海に落ちているものだということも知ることができました。

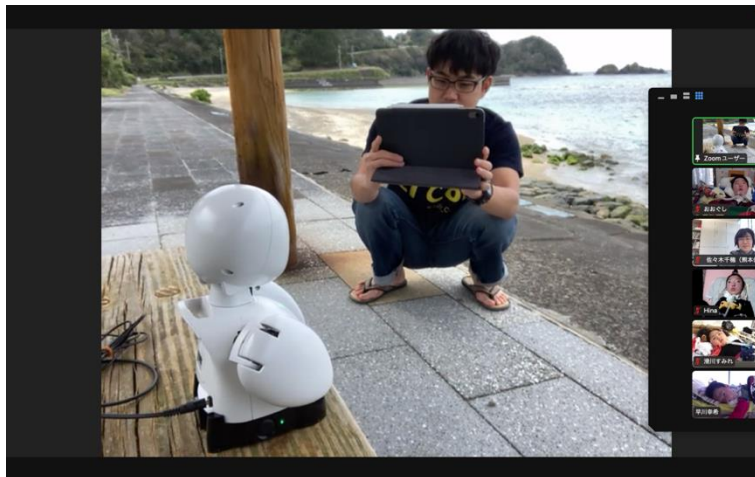


“特定 NPO 法人日本渚の美術協会”の SeaBornArt(シーボーンアート)・環境工作教室を開催し、オンラインを通じて地元のお子さん達と交流しました。次のページに、現地参加組の地元のお子さんたちと、リモート参加のお子さん達の集合写真を載せています。



20				15				10				5					
																令和4年01月01日 曜日	
																オンライン奄美	
																今日は、オンラインで奄美の環境工作教室	
																に参加しました。シーグラスとサンゴと貝が	
																らを使って写真立てを作りました。お母さん	
																に	
																お願いして沢山飾り付けをしてもらいました。	
																青いシーグラスがきれいに上手出来ました。	
																とても気に入りました。午後からは、奄美の	
																タエン浜にオンラインツアーで行きました。	
																海や砂浜や波打ち際が見れました。佐々木先	
																生の手にシーグラスがありました。一緒にし	
																た。明日は、オリヒメ操作をします。とても	
																楽しみです。	

Hinaさんの日記です。Hinaさんは毎日日記を書いていて、その時の出来事に関係した人に送ってくれます。毎日続いている習慣ですが、本当に素晴らしいですね。

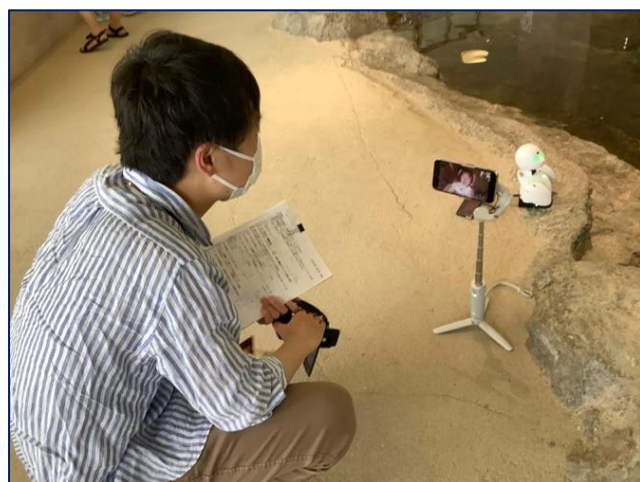


このツアーを進めてくれた、宇検村の地域おこし協力隊の栄雄大さん



取材も受けました。地元・鹿児島に引き続き、全国放送「おはよう日本」そして、海外向けNHK Worldでも紹介していただきました。

堀川雄太郎記者（NHK）：
奄美大島まで来ていただき、
どうもありがとうございました！



Koko さんのチャレンジ

生まれた時から重たい障害をもっていた Koko さん。脳波といって、脳の状態を表す検査では Koko さんが深い海の底で眠っているような波形を示していて、色んなことをするのは難しいだろうと言われたそうです。Koko さんのお母さまも、「全てを諦めていました」と言われていました。でも Koko さんは少しでもお口の下を動かすことができるということでした。そこで特別な機械を使い、お口の下の動きを 3D カメラで読み取ってコミュニケーションをする、というチャレンジに挑戦しました。

今回のハイテク機器はお借りしたもので使いこなすのは簡単ではないのですが、Koko さんのお母さまは一生懸命頑張って機械を使い、Koko さんに呼びかけ、お口を動かしてくれるように優しく促しました。Koko さんがそれに応じてくれるようになるまで、時間はそんなにかかりませんでした。Koko さんのお母さまは思った以上に早く Koko さんが機械を使った意思表示をしっかりとってくれたので、大変喜ばれています。

数日後には、お父さまのことも呼んでくれるようになりました。今は、特別に作ったアプリを入れたタブレットを使って、人を呼んだり気持ちを伝えたりできるように頑張っています。Koko さんのお母さまは、Koko さんのように重たい病気をもったお子さんでも、チャレンジすることで可能性が広がることをたくさんの人に知ってほしいと言われています。Koko さん以外でも、こういったハイテクの機械を使うことで、気持ちを伝えられるようになるお子さんが、本当は他にもたくさんいるのかもしれないね。



R さんのチャレンジ

もう1名、キリリと素敵なメガネ男子をご紹介します。R さんは、少し前まで手や足を使って機械を操作していました。意思伝達装置という機械を使って、自分の気持ちを伝えたり、お母さまを呼んだり、わたしが帰るときには「またきてね」と優しい声掛けをしていてくれました。少し前から、病気の影響で手と足の動きが悪くなりました。また、体の調子が悪く、苦しいと感じる時間も増えました。でも学校の授業は大好きで、担任の先生と日々訪問学級でがんばっています。手や足以外の操作で、これまで使えていた機器が使えるといいなと思い、メガネにつけたカメラで、目の動きを拾ってくれる機械を使用してみることにしました。メガネ型のカメラを作っている会社の方にもお子さんがいて、ぜひ力になりたいということでもとても素敵なメガネ型のカメラを作ってくださいました。操作も、作ってくれている研究者の先生等がサポートしてくださり、難しい操作が簡単に行えるように、説明書を詳しく書いてくださったり、オンラインで何度も説明をしてくださったり、また訪問にも同行してくださいました。

今もより上手に使えるように、学校の先生と相談しながら練習を続けています。お母さまは、R さんの様子をたくさん動画に撮っていて、時々入院するときに、その動画をみて元気が出せるようにということもがんばっています。さて、R さんは、学習発表会で上手にメガネ型スイッチを使って、発表されたようです。とてもカッコよかったそうですよ。今回の写真は、メガネ型のスイッチを使って、OriHime 分身ロボットを操作している様子です。キリッとした R さん、とても素敵です。



* 国立障害者リハビリテーションセンター研究所の伊藤和幸さんにご協力いただきました。

コミュニケーション編

今回のチャレンジドたちの冒険の中でも「コミュニケーション」ほど大切な挑戦はありません。「コミュニケーション」と言っても、いろいろな方法があります。皆さんも、音楽やファッション、スポーツなど様々なものや事を使って、たくさんの方とコミュニケーションしていると思います。コミュニケーションは、伝える側と受け取る側、それぞれの役割が大切です。どちらの役割が欠けていても、コミュニケーションは成り立ちません。チャレンジド達のコミュニケーション方法は、時に、多くの人の方法とは違うこともあります。特別な道具を使うこともありますし、受け手の想像力が必要なこともあります。でもそういったコミュニケーションを通じて、受け手もよりコミュニケーションが上手になっていくのではないかと思います。「きっとこんな気持ちなのではないかな」、あるいは「こういう合図に違いない」など、伝えたいであろうことを想像することを楽しむ、ということがコミュニケーションを上達させる一番の近道ではないでしょうか。そのためには、相手に「興味をもつ」ことが大切です。チャレンジド達のコミュニケーションは、そういったことを私たちに教えてくれます。どのチャレンジドたちも、素敵なコミュニケーションをしています。ここではその一部をご紹介しますね。

小学生の部：Yu さん

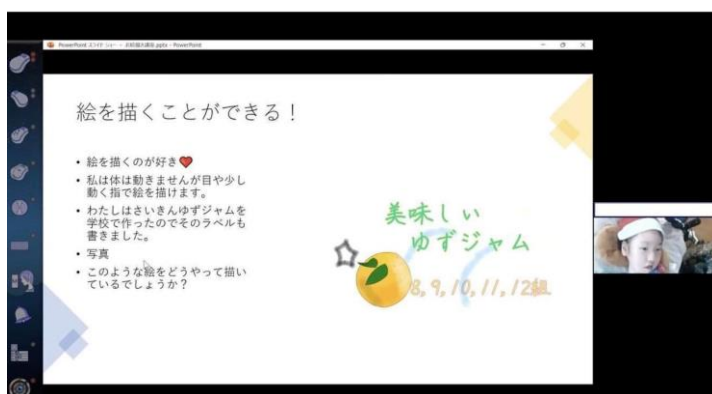
Yu さんは、時計を見たり、お顔の表情を上手に変えたりして気持ちを伝えてくれます。今は音の出る VOCA という道具を使って、言葉で伝えてみるということに挑戦しています。写真に写っている道具は、手触りがよく、色もわかりやすいので「つつい押ししたくなる」のです。この「つつい押ししたくなる」というのはとても大切です。そして、大好きなお父さんに声を録音してもらうことで、お父さんがいない時でもお父さんの声を聞くこともできます。新しく作った素敵な車椅子に、丈夫な固定具をつければ移動しながらでもこの道具を使うことができます。これから学校でも使ってみようかな、とのことでした。



VOCA: Voice Output Communication Aids = 音声出力ができるコミュニケーションの補助機器

中学生の部：COTO さん

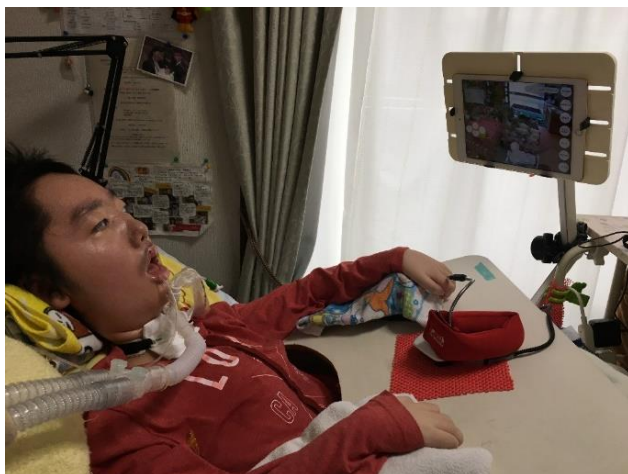
人の前で話をしたりする機会を経験したい、という中学生のチャレンジド、COTO さん。なんと、大学の講義を担当しました。内容も進め方も自分で考え、聞いている人が飽きないように工夫しました。途中でクイズコーナーや、視線入力機器を使って絵を描いてみせる実演コーナーも設けました。コロナでオンライン講義になっていたこともあり、遠隔での授業でしたが、放送大学熊本学習センターの方の協力で、リモートではありましたがスムーズに授業を行えました。その後、自分でその経験を SNS に投稿していました。「自信につながりました」という感想が印象的です。そして、投稿をみた全国のたくさんの方から「素晴らしい！」というコメントが寄せられていました。



当日はクリスマスということもあり、ムードを盛り上げるための衣装まで準備していました。内容も含め、とても素晴らしい授業でしたよ！

中学生の部：Taka 君

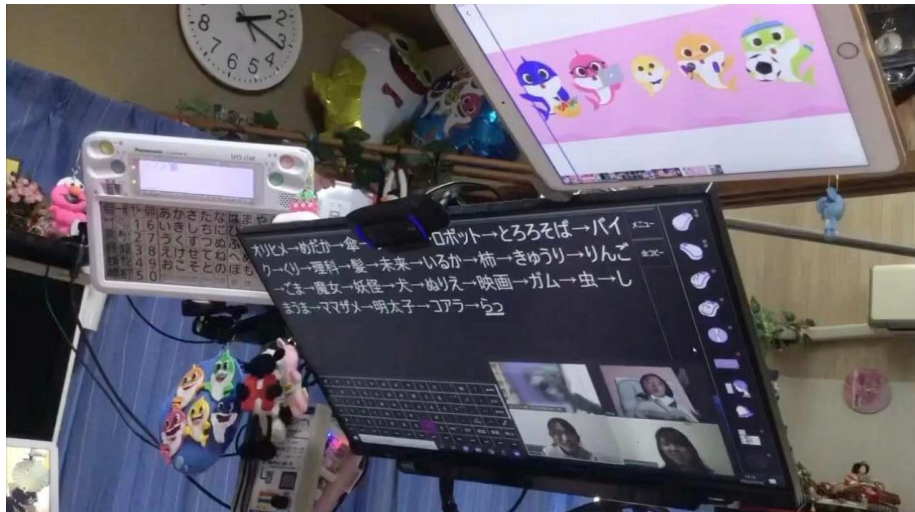
芸能関係に興味のある Taka 君。前のページで紹介したリモートツアーの時に、奄美大島の地元 FM からのオファーに快諾してくれました。



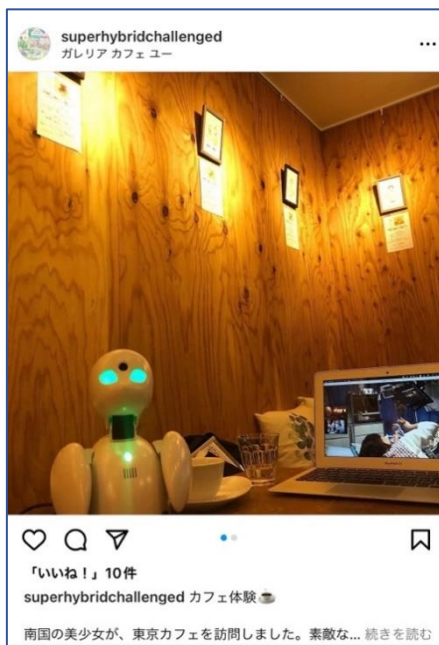
真剣なまなざしでタブレットを操作する Taka 君。最近では視線入力のパソコンの操作も上手になり、また家族以外の色々な相手との会話もテンポよく進むようになりました。今回のプロジェクトで体験できたことが、将来の Taka 君のお仕事であったり、やりたいことであったり、可能性をひらくことに少しでもつながるといいな、と思っています。

高校生の部：Hina さん

なんでも「やってみたいこと」をやってみることが大事、ですね。大学生のお姉さん達と、耐久しりとりゲームを楽しみました。また、東京の素敵なカフェへ OriHime 分身ロボットで訪問して、お店に来られている方々と楽しい時間を過ごしました。ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。



しりとりって、リモートでも、カフェで行っても楽しいものですね！

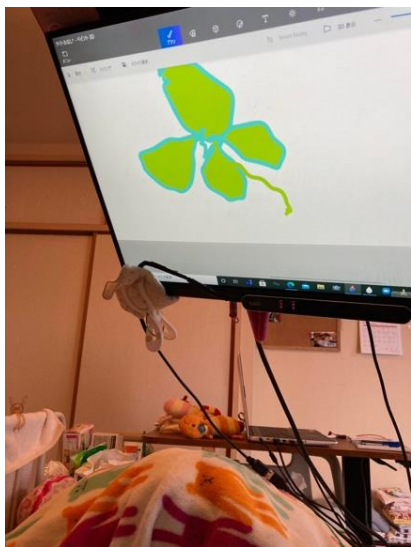


お絵描き & UMU プロジェクト

障害が重たいと、外に自由に出ていくことが難しくなります。コロナで外出ができなかったことで、皆さんもそんな状況が理解できたかもしれません。外に出ていけないことや、家の中でも自分の体を自由に動かすことができないと、様々な体験ができません。例えば、お店にいった自分で好きなものを買ってくる。そんな経験を通して、お金のことや、距離のこと、みんながどんな事に興味をもっているのか、どんな遊びをしているのか、といったことを見たり聞いたりして知ることができそうですが、体を動かせないと、そんな体験がしにくかったりします。

リトルポニーさんのお母さまは、リトルポニーさんに色々な経験をさせてあげたいという気持ちもあり、一緒に作った手芸製品をお店で売ることになりました。協力してくれたのは、熊本市にある UMU というお店です。このお店は全国の作業所というところで作っている作品の中で、特に素晴らしい物だけを売っている熊本が誇るスペシャルなアンテナショップです。熊本の市長さんは海外に行く時にここで、外国の偉い方へのお土産を買っていくそうです。

リトルポニーさんは手を使って絵を描くことが難しいので、特別な機器＝視線入力で絵を描きます。でも視線入力の機器を使って絵を描くのはなかなか難しいことです。視線入力というのは見たことがない人にはわかりにくいと思いますが、すごく簡単にいうとパソコンのマウスの代わりに、目で操作するようなものになります。一般的に多くの人は、手で何かの作業を行うということに慣れています。でも、リトルポニーさんはお母さまから教えてもらい、一生懸命練習をしたので、視線の操作が大変上手になりました。



上：リトルポニーさんが視線入力を用いてクローバーの絵を書いている様子

た。筆を使って絵を描く「絵手紙」というのを知っている人もいるかもしれませんが、まっすぐの線よりは、曲がっている「味のある」ものが評価されることがあります。リトルポニーさんの絵も、とても「味のある」仕上がりになっています。

リトルポニーさんとお母さまは、描いた絵を製品にして、ブランド立ち上げとショップ販売にチャレンジしました。ブランド名は“にじとあめ”。“にじ”はリトルポニーさんが見たいと思っている憧れのもの。“あめ”はお母さまが雨女ということもあり、そこからとった名前です。もちろん虹には雨が必要なわけで、必然のコラボチームをブランド名にしたということになりますね。そういえば確かにリトルポニーさん宅にお

邪魔するときにはいつも雨が降ることが多いんです。不思議ですね。

さて、ショップ販売にご協力くださったのは、熊本市にあるUMU（う～む）というアンテナショップです。UMUは全国の作業所などで作られるクオリティの高い製品を取り扱っています。今回、ショップ販売の“てほどき”はプロである店長の矢上さんが行い、インターネットなどの使い方が得意なリトルポニーさんのお母さまがオンラインショップを立ち上げ、遠くにいる人にも製品を届けることができました。



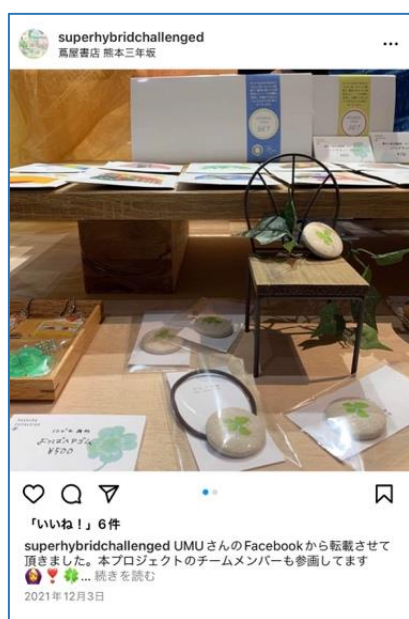
リトルポニーさんの作品と販売コーナー (熊本市中央区上乃裏通りにある UMU)

左：店長の矢上さんが作品を手にとって、OriHime 分身ロボットを操作しているリトルポニーさんに見せているところ。

右：カレンダーは特に人気の商品。ブランドイメージが統一されていて素敵です。

今後、さまざまな社会参加の方法が出てくるでしょう。そして働き方もその一つですね。最初は全てをリトルポニーさんにさせていただくことを考えていたようですが、一緒に製品を作るというところに辿りつきました。もう一つ、数字の意味などが外出などに制限の大きい生活体験から理解しづらいリトルポニーさんに、製品の販売という体験を

通じて数字の意味や価値などを理解してもらえれば、という思いもリトルポニーさんのお母さまにありました。今回のイベントでは、店舗販売に加え、オンライン販売も行い、さらに UMU がイベント（催事）で出張した際に、リトルポニーさんが自宅から OriHime 分身ロボットを操作し、実際にお客さんが製品を手にとってみている場にも参加していただきました。ハイテク機器を駆使して、素敵なお店デビューを果たしたリトルポニーさんでした。



熊本市の中心街、多くの人が集まる大型書店でのイベント（催事）でもコーナーを設けていただきました。イベントを主催されたスタッフの方々が、リトルポニーさんがデザインした髪留めをお揃いでつけています。リトルポニーさんは、このイベント（催事）でも OriHime 分身ロボットを通じて、自分の製品を手にとるお客さんと交流をしました。

さて、そんなリトルポニーさんにも刺激を受け、他の県に住んでいる Misaki さんも視線入力を使ったお絵描きをスタートしました。リトルポニーさんのお母さまが Misaki さんのお母さまに色々とおアドバイスをしてくれました。これからお絵描きが上手になったら Misaki さんの絵も何かの作品になっていくかもしれません。どうぞお楽しみに！

写真は視線入力を使ったパソコン操作のデビューを果たした Misaki さんの様子です。Misaki さんは、視線入力以外にも手のわずかな動きを使って操作を行うための「スイッチ」はとても上手に使えます。これに加えて、絵を描いたり、楽しくお勉強を進めたりするためのより高度な操作を練習するために、視線入力の操作練習を始めました。Misaki さんはもちろんですが、お母さまにとっても準備など覚えることがたくさんあるので、二人のチャレンジということになります。

視線入力を使用したパソコンを使いお絵描きにチャレンジした Misaki さん
楽しみながら頑張っていますよ！



おもちゃ遊び編

子どもにとっても大人にとっても「遊び」はとっても大切なもの。皆さんも色々な遊びを体験してきたことでしょう。色んな遊びは大切。でも、お店で売っているおもちゃをそのまま使うのが難しいお友達もいます。そんなとき、ちょっとした工夫で遊ぶことができるようになるんです。例えばシャボン玉。ストローで吸って、吹き出すのが難しくても、手でスイッチを使って上手に遊ぶことができるのです。

Misaki さんはシャボン玉が大好き。遊びすぎて、ちょっと壊れちゃったけど、修理して遊ぶことができました。目の輝きや、口元がほっこりしている様子から、とっても嬉しいと思っているのがよくわかりました。でも、お家の中で遊ぶと、お母さまがあとから壁や床を掃除するのが大変だそうです。

Misaki さんのシャボン玉イリュージョン



Misaki さんは手のわずかな動きを使って機械を動かすためのスイッチ操作がとっても上手なのですが、シャボン玉に引き続き、霧吹き機を使って、炙り出しアートをするのも楽しいかもしれないと、お母さまが考えてくれたそうです。お母さまのアイデア、すごいですね！

ハイテクおもちゃも素敵だけれど、こういった身近にあるものに手を加えた遊びもとっても素敵ですね。少しだけ加工が必要なこともありますが、詳しい人に聞いたり、インターネットで探したりすれば、色々な情報が出てくるので、興味がある方はぜひ探してみてくださいね。

噴霧器アート：Misaki さんの別の遊び。その名も「噴霧器アート」。噴霧器を使って炙り出しのようなアート制作を楽しんでいます。お母さまの工夫、素晴らしいですね！



Yu さんのシャボン玉遊びチャレンジ：Yu さんも、お外で遊んでみました。上手にスイッチを操作して、シャボン玉を綺麗に作っています。素敵な笑顔が印象的で、まるで妖精のようですね。



使ったもの：

BD アダプター + PPS スイッチ（パシフィックサプライ社）の空気圧ホースの先に DAISO のシリコン製の豚さんをつけたもの。両手で握る動作で、上手にシャボン玉を吹き出しています。

熊本編

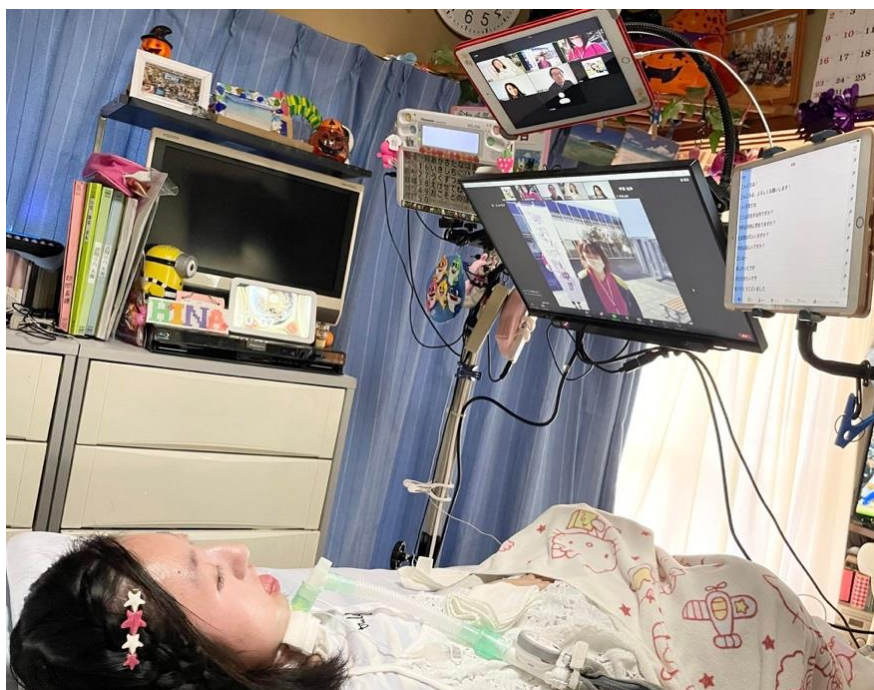
この写真は Hina さんがまだ小さかった頃、熊本保健科学大学の Lovers というサークルのお姉さん達と、熊本大学五高記念館という建物の前で一緒に写真を撮ったもので、「SMA（脊髄性筋萎縮症）家族の会」という会のホームページで紹介されている冊子にも使われています。この頃あまり遊びに行くところがなかったこともあり、はるばる県外から熊本まで遊びに来てくれました。



そんな Hina さんも、高校生になりました。今回のプロジェクトでは、一貫して、他のお子さん達をリードして、色々なイベントに参加したり、イベントの中で上手にコミュニケーションをとったりして、モデルを示してくれました。

今回のプロジェクトの中で、熊本保健科学大学の学園祭でリモートツアーにも参加してくれました。子どもの頃から交流のあるサークル Lovers の皆さんの主催によるもの

です。熊本地震やコロナで熊本になかなか遊びにくることができなくなっていた Hina さんにとって、リモートツアーも楽しみの一つとなったようです。Hina さんはたくさんの機器を使って、コミュニケーションをしたりオンラインイベントを楽しんだりしています。



[illegible]

もう1箇所は南小国町にある坂本善三美術館。山下学芸員のサポートを得て、畳張りの素敵なギャラリーにて、OriHime 分身ロボットを使ったりリモート美術鑑賞を楽しみました。自由に作品を鑑賞し、自由に考えることのできる空間。美術館は新しい自分に出会うことができる場でもあります。美術館自体もアクセスしにくい方々へどうアプローチしていくかを模索しているところ。常に新しい試みを柔軟に取り入れて地域社会の中で本当の意味での美術教育を続けてきた坂本善三美術館で、チャレンジド達も新しい経験をすることができました。



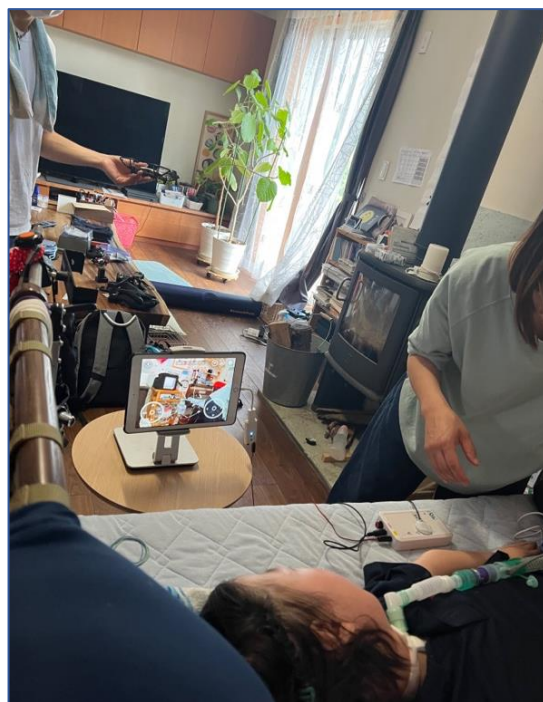
今回の試みは、美術館にとってもチャレンジだったそうです。和風の空間に OriHime 分身ロボットが違和感なく映えます。坂本善三先生も喜んでいるのではないのでしょうか。

未来に羽ばたくドローンプロジェクト

ドローンには夢があると思います。身近に3次元の移動が可能になったとき、チャレンジドたちはどのようなことを希望するでしょうか？家の中にいるペットが自分が見えないところで何をしているのか知りたい。家の隅々を探検してみたい。はたまた学校を上から撮影して、学校のムービーを作ってみたい。そんな夢を叶えてくれるツールが手に入りやすくなりました。そしてタブレットで操作ができるようになってきたこともあり、チャレンジドたちにもいろんなチャンスが出てきました。もちろん、色々な法律（ルール）があるので、しっかりそれも一緒に勉強してから楽しみましたよ！

ドローンの名前の元となった「ブーン」というハチのような音。最初はちょっと驚いたような顔をしたチャレンジドもいましたが、すぐに興味をもって操作の練習を頑張りました。最初は家の中で練習して、外に出て飛ばしてみました。写真や動画の撮影もできます。“じゃじゃひな”さんは、元々写真撮影が好きです。タブレットのカメラにズームレンズをつけて撮影を楽しんだり、撮影した写真を自分でアカウントを作ってSNSに投稿したりしています。将来はカメラマンになるのかもしれません。

最初はお家の中で操作の練習をしました。撮影については、OriHime 分身ロボットを使ってペットのうさぎさんを撮影したりして、リモート撮影の腕をみがいていきました。





じゃじゃひなさんが撮影した素晴らしい桜の一枚。地元新聞から取材を受けたこともあるそうです。学校にも写真の特設コーナーが設けてありましたよ。



こちらはドローンで学校を撮影した1枚。あまりに素敵なので、学校の紹介ムービーを作って欲しいという依頼があったそうです。将来は空撮カメラマンになるのかもしれませんが。

次のパイロット・COTOさんも練習して色んなところで飛ばして楽しみました。学校の体育館や自然豊かな親戚の家の近くに行って飛ばしました。手のわずかな動きを使ってタブレットを操作し、ドローンを飛ばすのは、かなり難しいのですがあつという間にできるようになりました。下にCOTOさんの操作の様子と、操作画面の様子を載せていますが、Instagramの方で動画もUPしているのでぜひアクセスしてみてくださいね。





superhybridchallenged

...



「いいね！」 7件

superhybridchallenged 未来に羽ばたくドローンプロジェクトの活動紹介です 🍀

ドローン 🚁 が2人目のパイロットの元に渡りました!!

今回は 💡

- ・パイロット
- ・ドローンの操作
- ・実際に飛ばしている様子

の3点を紹介していきたいと思います 📝

◆2人目のパイロットは制服を着こなすNちゃんです。

◆ドローンの操作は、iPadに接続したスイッチコントロールからドローンのアプリを操作し、行っています 📱
(視線入力でも可能)

スイッチ操作で主にジェスチャのパンという機能を使ってドローンの移動を行っています。

今回使用しているドローンは、写真・動画どちらも撮れます。

ComLabJapan チャレンジド：先輩からのエール

ComLabJapan のチームメンバーの中にも、素晴らしいチャレンジドがいますが、今回はお二方に先輩からのエールを送っていただくことにしました。

◆益子千枝さん◆

表紙のイラスト制作と、みんなの活動を SNS で伝える広報をさせていただきました。

私も体に障害があり、車椅子やベッドで過ごしています。手の力も弱く、ペンを握るのもお手伝いが必要です。でも、マウスの代わりになる機器を工夫して、パソコンで絵を描くことができます。

こちらに登場するお子さんたちは、私よりずっとハイテク機器を使いこなしていて、体は動かしにくくても、さまざまなことに挑戦しています。奄美大島のオンラインツアーでは、おうちからロボを上手に操作しているのが印象的でした。

表紙のイラストは、その時の様子を少し変化させて描いたものです。（実際にロボが行けたのは海岸まででしたが、今後は海に入れるロボも登場しそうですね。）

本当は、「海に行きたい！」と思ったら、実際に行けるのが一番良いはずなんです。でも、今はまだ、おうちから出るのが難しいこともあるから、今回のプロジェクトが、夢をかなえる「第一歩」になったらいいなあと思います。そして、その先に、みんなが行きたいところへ自由に行ける日が来ることを願っています。

みんなの胸の中には、夢がたくさん詰まっていると思います。中には、体験が少ないために、まだ見つかっていない場合もあるかもしれません。

まずはいろいろなことに挑戦して、好きなこと、やりたいことを見つけてほしいです。自分に合う機器や道具と、ちょっとした工夫と、周りの人のサポートがあれば、できることは何百倍にも増えます。やりたいことをお友達や周りの大人に伝えて、たくさん巻き込んで、大きな夢へとつながっていきますように！

◆早川幸希さん◆

「大きくなったら何をしたいか」きっと誰もがいずれ考える時がくるでしょう。ベッドでの生活が長い私にとっても、それは大きくて果てしない問題でした。学校を卒業して社会にポツンと取り残された時に、何年も何年も考えていたこと。「一人では何もできないし」「おうち時間が多いから出会いもないし」「何をしたらよいか分からない」。無理な理由ばかりを並べては、堂々巡りの日々でした。

でも、今ならそんな自分にも「大丈夫！できることはあるよ」と伝えたいです。できないことが多くても、言葉に自信がなくても、経験がみんなより少なくても、誰にでもひとりひとりに「思い」はありますよね。その思いの中には、今日嬉しかった出来事、困っていること、やってみたいこと、好きなことなど、いろいろなものがあると思います。ですが、どんな時も、これからはひとつひとつの思いを伝えることがあなたのお仕事です。

まずは少しでも興味のあることは何でも、リアルでもオンラインでもどちらでもよいので、たくさんコミュニティに参加してみましょう。そうして、いろいろな人の中で「世界」のことを学びながら、旅をして、自分の思いを発信していきます。その中で、どうしてもこの人に会いたい！と思う人が見つかったら、届くまでメッセージをたんぽぽの綿毛のように飛ばし続けるのです。思いはきっと伝わります。だから、伝え続けてほしいな、と思います。いつか、その人に出会えたことがあなたの宝物になるし、居場所にもなるはずですよ。

私は、これからも、ちほ先生や広報チームの皆と一緒に、小さなチャレンジ達が「思い」を伝える場所をひとつでも増やせるように、活動が続けていきたいです。きっと未来は、“Everything will be alright!” です。

広報メンバーで更新しています。
SNS もぜひフォローしてくださいね！

● Instagram

@superhybridchallenged



● Facebook

<https://www.facebook.com/comlabjapan.since2009>



おわりに

いかがだったでしょうか。この冊子をお読みいただきどのようなことを感じられたでしょうか。感想を是非、下記のメールアドレスの方にお寄せください。またチャレンジ達への応援メッセージなども、受付させていただきます。

今回紹介したチャレンジドのお母さまから、お笑い芸人さんの「あたりまえ体操」をまじまじとお子さんが見ている、と教えていただきました。「右足出して、左足出して、歩ける。あたりまえ・・・」と続きます。歩ける人にとっては「あたりまえ」のことです。でもそのお子さんにとっては、「歩くっていうのはそういうことか」と、思ったことでしょう。他にも、「うちの子はサーカスのどこが面白いのかわからないようです。頑張って連れて行けたけれど、体を動かせないから意味を理解するのがまだ難しいのでしょうね。」と聞いたことがあります。私たちが普段思っている「当たり前」は隣の人にとって「当たり前」ではないかもしれません。そういったことを普段から意識して生活するのは結構大変です。ついつい忘れてしまいます。そして違いを尊重する、というのは言葉で書けば簡単ですが、実際には難しいことだと思います。その「難しい」ということを忘れないことも大切なのではないかと思います。

さて、今回のチャレンジドの中に、つい最近生徒会の役員に立候補したお子さんがいます。小学校に上がる前は、会っても一言も話してくれない「恥ずかしがり屋さん」だったので、その話を聞いてとても驚きました。このお子さんの選挙公約は「みんな仲良く、けんかしても仲直りして、明るく楽しい学校にしたい。」ということでした。大人になっても皆がこんな気持ちを忘れずに、違いを認めあって欲張らない。そうすれば戦争のない平和な社会になると思います。子ども達が素直にそう考えることも、大人の社会ではずいぶん難しいことなのだと感じます。この冊子を書いている2023年の3月はそういう社会の状況です。でも私たちはこのチャレンジドの一生懸命さを見習いながら、未来に向かって少しずつでもよい社会に変えていかなくてはなりません。このプロジェクトに関わった2年間の間には様々な社会の変化がありましたが、そういったことも考えさせてもらうきっかけをいただきました。

最後になりますが、移動遊具に乗って欲しい、自分で作った作品をお店で売ってみる、ドローンを飛ばして上から眺めてみる、旅行に行っている人々と話をしてみる。こういった経験をさせてあげたいと思っていた私（たち）の「夢」にご協力くださいましたすべての皆様、そして本プロジェクトに対してご助成くださいました小林製薬青い鳥財団の皆様には心より感謝申し上げます。

ComLabJapan 代表 佐々木千穂

連絡先：com.shien@gmail.com



スーパーハイブリッドチャレンジズの冒険
みんなの夢のを見つけ方

発行：2023 年 3 月 31 日

発行者：ComLabJapan

本冊子は小林製薬青い鳥財団の助成を受けて作成されました。

*無断転載は固く禁じます。